滝谷花崗岩で包丁を研いでみた

OWCC 中川和道 20251218

今年 2025 のお盆山行で登った滝谷末端は、珍しく雪が皆無で、花崗岩が真白に露出していた。写真は雄滝から滝谷出合まで下降っていく松田明博。谷底が見事なまでに白く輝き、まるで雪のようだった。ここまで滝谷の底があらわに見えるのは珍しい。

図 1．滝谷花崗岩の素顔がまばゆい滝谷出合を下る。クライマーは松田明博。

帰宅後、原山智氏の本[1]を読み、動画[2]も見て調べた。この花崗岩は「滝谷花崗岩」だという。涸沢の溶結凝灰岩が黒っぽいのとは見事に対照的だ。さっそく 55 年前の学生時代に拾った滝谷花崗岩を押し入れから引っ張り出して眺めた。中川は、この岩がなぜこんなに美しいのかと、当時は、不思議に思った。その岩が、滝谷花崗岩と呼ばれることを 75 才にして初めて知った。

懐かしさをかみしめながら、ふと思いついて、滝谷花崗岩で包丁を研いでみた。果物用の包丁だが、うまく研げてなかなかの切れ味だ。豊作の柿がうまかった。

原山氏[1]によれば、この花崗岩が生成したのは約 167 万年前。世界的に最も若い花崗岩だという。槍穂高一帯にあった火山が陥没してカルデラとなった後、西側が激しく上昇して地層が傾いた。北穂高岳からキレット越しに南岳方面を見ると、西が高く東が低い、あの独特の縞模様がその証拠だ。槍穂高は、圧倒的な力で西側が持ち上げられ、この時、地中深くにあったカルデラの底の花崗岩が飛騨側の地表へと顔を出した。図 1 に見える真っ白い花崗岩がそれだ。大地が傾かなかったら、我々クライマーが滝谷花崗岩に出会うことはなかった。

原山氏は、地質調査所にご勤務の頃、滝谷を登って槍穂高の成り立ちを調べたのだという。文献[1]には滝谷の雄滝の他にもナメリ滝なども登場し、岩石組成の詳細が写真とともに記述される。その調査力の礎となった強い山男「原山智氏」の素顔が前面に見える文献だ。クライマーの登攀記録も面白いが、地質学研究者が未知に挑むこういう文献も、何か、共通の指向性を感じて面白い。

いい岩に昔と今また出会い、いい本に出会った。願いがかなうなら、著者にお会いしたいものだとつくづく思う。大阪労山ニュース 2025 年 9 月号に書いたとおり、今年 2025 年の夏は集中豪雨直後で滝谷遡行は完遂できなかった。来年こそは、原山氏のこの本を片手に、滝谷末端から遡行し第 4 尾根へのクライミングに挑みたい。文献 2 の動画も必見だ。

[文献 1]原山智・山本明『「槍・穂高」名峰誕生のミステリー -地質探偵ハラヤマ出動-』、ヤマケイ文庫、2014 年 3 月。

[文献 2]原山智『超火山だった槍・穂高』https://www.youtube.com/watch?v=OXbvX4MCxXQ

.